

資料紹介

江戸川乱歩「魔術師」

解説

大正十四年から昭和二年三月までの二年余りを、乱歩は作家としての最良の時期であったとしている。「自分の持つている小説力というべきものを殆ど出しつくしたのであった」（『探偵小説四十年』）。朝日新聞に連載していた「二寸法師」が完結すると、昭和二年三月、乱歩は当分筆を断つことを決意して、放浪の旅に出る。

十四か月の休筆期間を経て、昭和三年の夏、「陰獣」で復帰すると、翌四年には長篇「孤島の鬼」を連載、同年に「蜘蛛男」を書いている。

「蜘蛛男」が掲載されたのは講談社の『講談倶楽部』であった。講談社の求める通俗的な読物を書くことは、当時の作家のあいだでは敬遠されてもいたが、乱歩はこれを引き受けた。編集者の熱心な依頼や、高額の原稿料、当時の乱歩の「生きる」とは妥協すること」といった自暴自棄に近い気分、さまざまの要因があつて「ヒョイと書く気になつたのである」と乱歩は書いている。

「蜘蛛男」の連載が終了すると、同じ『講談倶楽部』に「魔術師」の連載を開始する。引き続き名探偵の明智小五郎が特異な犯罪者と対決する小説である。乱歩は同時期に、講談社の雑誌『キング』に「黄金仮面」を、『報知新聞』には「吸血鬼」を連載することになる。それまで雑誌『新青年』を中心に執筆し、探偵小説の愛好家には知られていなかった乱歩だったが、この時期には、それ以外の多くの読者を獲得して、全国的に名前を知られるようになった。

「魔術師」は、蜘蛛男事件を解決した明智が、湖畔のホテルに滞在しているところから始まる。明智はそこで宝石商玉村の娘、妙子と知り合う。帰京した妙子から、叔父の福田氏に届く怪しい紙片の捜査を依頼される。玉村邸に入る前に、明智は監禁され、その夜、福田氏は殺害されてしまう。

玉村家の一族を殺す計画を遂行していたのは「魔術師」奥村源造だった。四十年かかった復讐である。だが奥村の娘文代は、父の犯罪に心を痛め、明智の脱出に力を貸す。玉村家に潜入した明智は、玉村氏の家族を魔術師の攻撃から守っていく。

この事件で明智を助けた文代は、明智の助手となって「吸血鬼」事件でも

活躍する。その後、明智夫人として、多くの作品に登場することになる。

ここに紹介する原稿は、「魔術師」連載第八回のものである。乱歩は多くの書簡を複写式の原稿用紙で書き、控えを保存していたのだが、一部の原稿についてもそのようにしていたのだ。だが残念ながらその量は多くはない。「魔術師」の原稿の控えも、この部分だけが残っていたものである。この冊子には『東京朝日新聞』に書いた随筆「人形」（昭和六年一月十四日から十九日、五回連載）の原稿と、「富士」に書いた「白髪鬼」執筆について（三月号）の控えがある。

この「魔術師」第八回は『講談倶楽部』昭和六年三月号に掲載された。掲載時は「悪戦苦闘の巻」となっている。原稿の冒頭にある、これまでの荒筋を説明した部分から「消失せた令嬢」の節は、掲載されたものと同じである。ことから、この原稿をそのまま使用したことがわかる。二十四枚目以降の「野球団の拾ひ物」の節は、掲載されたものには存在しない。「消失せた令嬢」のあと「魔術師の激怒」という節になる。

「野球団の拾ひ物」では、縛られた男

が発見される。発表された「魔術師」で確認すると、これは明智の服を着ているが、その直前で登場した三次という魔術師の手下である。連載では翌月

ということになるが、少し後の部分にその説明が書かれている。しかし、縛られた男を発見したのは警官で、時刻

も朝ではなく深夜ということになっている。野球団による不審人物の発見、

明智が縛られていたと思うと実は…、という部分は採用されなかったのでは

ある。前年より連載のこの「魔術師」は、六月号の第十一回で完結する。クライ

マックス近くで冗長になることを避けたということだろう。大幅な変更が加

えられているものではないが、乱歩の執筆過程の跡が垣間見える資料であ

る。 落合 教幸

翻刻

「魔術師」

三月号

江戸川乱歩

怪汽船の巻

消失させた令嬢

魔術師と呼ばれる復讐鬼、奥村源造

は、父の仇を報ひる為に、四十年の間、

考へ抜いた大計画に基いて、宝石王玉村一家の襲殺を計った。

初めは徐々に、後に至る程テンポを早めて、遂に旧旗本屋敷地下室の水責めとなつた。

玉村善太郎氏令息■一郎、二郎、愛嬢

妙子さんの四人が、■アメリカ帰りの富豪と化けた、賊の甘言にのせられて、

煉瓦造りの■穴蔵へ■幽閉され、それを逃■れようと、一方の壁を破つて、

地上へと掘り進んだが、■■そこに賊の最後の罠が仕掛けてあつた。

掘るに従つて、土が■■軟くなつた。ジクジクと水がにじみ出して来た。そ

して、「これは」と思ふ間に、ポト／＼と垂れ始めた雫が忽ち、瀧津瀬となり、頭の上から、ドツと流れ込む津

波の様な泥水。庭の古池の水が、そこへ流れ■■落ちる様に仕掛けてあつた

のだ。

穴蔵の中は、瞬く内に、膝から腹、胸から首へと、水嵩が増して行つた。どこに逃がれる隙間もない。

玉村一家の人々は、暗闇の水中に呼び交はしながら、足を離して、■

■泳ぎ始めた。だが、いつまでそんなことが続くであらう。時は一月の終り、

冷た手足は凍つて、已に感覚を失つてしまつた。やがて、心の臓までも凍りついてしまふであらう。

その中でも、■氣掛りなのは、妙子のことだ。彼女は■■泳ぎは出来ない筈だ。とつくに溺れてしまつた

のではあるまいか。呼べど叫べど、答へはなく、暗闇の水中を、あちこちと

探し廻つて見たけれど、■■手にも足にも触るものはない。一体どこにどうしてゐるのであらうか。

復讐鬼の方には、悪魔は悪魔ながらの■理屈もあらうけれど、敵を討たれる玉村氏一家のものは、我身に何の覚

えもないことだ。親が若気の至りで、どの様な悪いことをしたにもせよ、それ故に、子や孫が一人残らず、この苦しみを受けなければならぬといふ道理

はない。

父善太郎氏は、■■親の報いとあきらめもしようけれど、可愛い子供が

三人まで、同じ憂き目を見せられるとは、余りと云へば残酷だ。■■そればかりではない。一郎と妙子とは、已に

一度、ひどい手傷を負はされてゐる。その外、善太郎氏の弟の得二郎氏は無

残の最後をとげ、二郎の恋人花園洋子は、手足をバラ／＼に斬りさいなまれ

たではないか。

(別行)

ア、何といふ貪慾な復讐鬼であらう。彼は、玉村家の、最後の一人までも、イヤ、一家のものばかりではない。

その近親にまで手を延ばして、残酷無比の殺戮を行はうとしてゐるのだ。最早や復讐ではない、立派な殺人■■狂

■■である。天はかくの如き大悪魔の跳梁を、いつまで許して置くのであらう。

イヤ／＼さうではない。自然の攝理といふものは、存外公平である。■■

■■企みに企んだ悪事にも、つい■■思ひもよらぬ抜け目があるものだ。

魔術師の場合では、文代の内通がそれであつた。彼女は穴蔵水責めの悪企

みを小耳にはさみ、隅田川の川口に碇泊してゐた、賊の汽艇を抜け出して、

■■玉村親子の危難を、名探偵明智小五郎に急報し、彼を案内して、旗本

屋敷へ駆けつけたのである。

明智はこのことを、電話で警視庁の波越警部に報じて置いたので、深夜ながら、警視庁と小■石川警察と、両方

から数名の警官が出張し、玉村氏が同行して、別間に待たせてあつた書生

達と力を合はせ、被害者の救出しに努力した。

救助者の一群は、■■秘密の階段を駆け降りて、穴蔵の入口に殺倒したが、

嚴重な鉄扉の外に、煉瓦の壁■が積み上げてあるので、容易に破れるものではない。

(別行)

若し一人や二人の救助者であつたら、恐らく玉村親子の息のある内に、救出すことは、■到底不可能であつたらうが、多人数の力は恐ろしい、てんでに道具を採り出して来て、煉瓦の継目をこちるもの、叩くもの、蹴飛ばすもの、汗みどろの奮闘で、やつと壁をくづし、鉄扉の錠前■を破ることが出来た。

扉を開くと、一度にドツと溢れ出す濁水、先に立つた警官達は、はづみを食つて、階段の根本まで押し流される騒ぎであつたが、兎も角も、■：■親子三人のものを、助け出すことに成功した。

地上の一室へ運んだ時には、三人ともグツタリとなつて、殆ど死骸も同然であつたが、焚火をするやら、湯を沸かすやら、手を盡した介抱に、善太郎氏も一郎も二郎も日頃健康な人達■■のこと故、何なく気力を恢復した。

■意識を取戻した善太郎氏が、第一に尋ねたのは、

「妙子は、妙子はどうしました。」

と、愛嬢の安否であつた。

人々は、暗闇の水中で、妙子さんの姿がなくなつた由を聞くと、速早く穴蔵へ降りて、隈なく搜索したが、不思議なことには、影も形もない。扉は嚴重に閉つてゐたのだし、水の落ち込む穴から地上へ抜け出すなんて、屈強な男子にも出来ない藝当だ。とすると、妙子さんは、一体全体、どこへ消え失せてしまつたのであらう。

イヤ、消え失せたのは、妙子さんばかりではない。魔術師の奥村源造も、どこへ逃げ去つたのか、何の手掛りも残さず、もつとをかしいのは、肝腎の明智小五郎と賊の娘文代の二人も、いつの間はどこへ立去つたのか、探しても影さへ見えぬのだ。

では、彼等は一体どこに何をしてゐたのか、玉村父子■は首尾よく危難を逃れたのだから、その方は一先づお預りとして置いて、作者は明智と文代の其後の行動を、読者諸にお知らせしなければならぬ。

玉村父子救出しの見込みが立つと、明智はもう、その場にグヅ／＼はしてゐなかつた。彼は早くも、妙子さんの姿のないことを見て取り、文代に尋ねると、■：■

「ア、あたし思ひ出しました。あの人は、妙子さん丈け命を助けて、■船

へ連れて来る様な■：■相談をしてゐたのです。」

との答へだ。

「それにしても、どうして穴蔵から連れ出したのでせう。特別の通路でもあるのですか。」

「エ、あたし、それを知■つて居ります。穴蔵の煉瓦■に小さな隠し戸がついてゐて、そこから、邸の外の■原つばへ抜けられるのです。」

あとで調べて見ると、穴蔵の■煉瓦の数枚が、倉庫の扉の様に、外から開らく仕掛けになつてゐた。賊はその外へ廻つて、■目ざす妙子さんを、闇の穴蔵から、ソツと連れ出して行つたものに相違ない。■父も兄達も、あの騒ぎの最中なので、それに気づかなかつたのだ。

「では、すぐそこへ案内して下さい。あなたはなぜ早く、それを云はないのです。」

文代は叱られて、答へる術を知らなかつた。彼女は最初から、そこへ気がつかぬではない。だが、そこには、まだひよつとしたら父が潜伏してゐないとも限らぬ。いくら正義の為とは云へ、恋の為とは云へ、父を賣るのに、躊躇を感じない娘があるだらうか。これ程苦しんでゐるものを、まるで思ひやり

もない様な、明智の言葉がうらめしかつた。

と云つて、もうこゝまで来たものだ、今更ら父をかばひ立て■してゐる訳には行かぬ。■

「エ、ご案内しますわ。」

彼女は悲しい決意を示して答へた。行つて見ると、洞■穴の入口は、蓬々と生ひ茂つた雑草に覆はれて、一寸見ただけでは少しも分らぬ様になつてゐた。

その雑草をかき分けて、用意の小型懐中電燈を点じて、穴の中へ這ひ込んで見たが、大方想像してゐた通り、そこにはもう、人の影もなかつた。

「アラ、こんなものが落ちてゐましたわ。」

文代が目ざとく、土の中から拾ひ上げたのは、銀製のヘヤピンである。見覚えとてはないけれど、妙子さんのものに相違ない。

「やつぱりさうだ。もう今頃は、あいつの船へ連れ込まれてゐる時分かも知れませぬ。サア、船へ行きませう。まさか、あなたを置き去りにして出帆して■ま■ふことも■ない■でせう。僕をその船へ案内して下さい。」

「エ、それはもう、あたし覚悟してゐますけれど、あなたお一人では

……」
 「ナニ、心配することはありません。グズ／＼してゐては、手おくれになります。それに大勢で向ふよりも、僕一人の方が却つて仕事が仕易いのです。僕はもうちやんと、その手だてを考へてあります。」

「そこで、二人は手を取つて、大通りまで駆け出すと、タクシーを備つて、隅田河口へと飛ばした。」

文代の指図で車の止つた所は、月島海岸の見渡す限り人気もない、淋しい広つばであつた。川口の航路をさけて、遙か彼方に、一艘の小型汽船が、泊ることもなく漂ふともなく浮んでゐる。淡い■橋燈の光で、やつとその所在が分るのだ。

「何か合図があるのですか。」
 親船から艇船を呼ばねばならぬ。それには賊の定めた合図がある筈だ。

「エ、」
 文代は答へて、ポケットからマツチを出すと、それをシユツとすつて、二度振り動かし、燃えかすを海の中へ投げ捨てた。

暫く待つと、ギイ／＼とオールのきしり、小型ボートが白い小波を立て、岸へ近づいて来た。
 明智はす早く■岸の石垣に隠れる。

「文ちやんかい。」
 ボートから低い聲が尋ねた。

「エ、お前、三次さん？」

「さうだよ。もう親父さん帰つてゐるぜ。文ちやんはどこへ行つたと、えらく探■してゐたぜ。」

「お父さん、一人で帰つたの。」

「インヤ、例のお嬢さん■と二人連れさ。」

■低い聲だけれど、明智はこの問答を、すつかり■聞き取つた。

「三次さん、ちよいとこ、まで上つてくれない。荷物があるのよ。」

文代は兼ねての打合せに従つて、三次を上陸させようとした。

「荷物だつて、何を又買ひ込んで来たんだね。」

それとも知らぬ、お人好しの三次は、ノコ／＼と石垣を伝つて上つて来た。

「文ちやん、荷物つて、どこにあるんだい。」

「こ、よ。」

「どれ、どこに。」
 と、三次が覗く石垣の蔭から、ヌツと現はれた黒い人影■。

「ヤ、貴様、一体誰だツ」

「ハハ、、、、びつくりしなくてもいい。聲さへ立てなければ、無闇に発砲する訳ぢやないんだから。」

明智■がをとなしい口調で答へた。だが彼の右手には、ピカ／＼光るピストルの筒口が、三次の胸板を狙つてゐる。

野球団の拾ひ物

その翌朝、同じ月島海岸の広つばで、附近の工場の社会職工が組織する、素人野球団の人達が、■寒稽古の野球練習をやる為に集つて来た。そして、まだ練習を始めない先に、彼等は、何とも不思議千萬な拾ひ物をしたのである。

拾ひもといふのは、高手小手に縛られ、猿轡をはめられて、波打際の石垣の上に転がつてゐた一人の人間であつた。

見ると、その男は、顔や手先は、眞黒に汚れてゐる癖に、洋服丈は仲々上等の、紳士の様な背広服を着込んでゐた。

「何だらう、変な奴だね。」

拾ひもののまはりに集つた野球団の人々■は、その男■をどうし■取扱つてい、のか、ちよつと見当がつかかなかつた。

「兎も角、繩を解いてやらうぢやないか。■可哀相に」

一人の■男が近づいて、繩を解かうとかゞみ込んだが、ふと繩にはさんである、手帳の切れつぱしの様な紙を発見したので、先づそれを抜き出して読んで見た。

この男発見次第警察へ御引渡し■を乞ふ。悪人■なり。委細は本人より御聞取り下され度し。

「オイ、この野郎泥棒なんかだぜ。」

■
 「兎も角お巡りさんに知らせて■やらうぢや■ないか。」

二三人がもよりの交番へかけつけ、■警官を案内して来た。

■
 ■警官は、男の猿轡をとつて、色々■介抱して見たが、■よつほどひどくやられたと見えて、なか／＼正気に返らぬ。グツタリとなつ■て、何かブツ／＼訳の分らぬことを呟くばかりだ。

上衣のポケットを検べると名刺入れが出て来た。警官はそ■の中の名刺を抜取つて、ちよつと眺めたかと思ふと、目をまん丸にして、■
 ■と転がつてゐる男を眺めた。

名刺には、「明智小五郎」と印刷してあつた。有名な素人探偵だ。波越鬼

警部の親友だ。お巡りさんが驚いたのも無理ではない。
 騒ぎが大きくなった。名探偵が縛られて、**■**海岸に転がつてゐた。しかも、「悪人なり、警察に御引渡しを乞ふ」とあるに至つては、正に椿事である。
 早速このことが警視庁に報じられ、親友波越警部は取るものも取りあへず、現場に出張

1
 警部親友の如き者ありては、
 悪人なり、警察に御引渡しを乞ふ
 正に椿事である

2
 警部親友の如き者ありては、
 悪人なり、警察に御引渡しを乞ふ
 正に椿事である

3
 警部親友の如き者ありては、
 悪人なり、警察に御引渡しを乞ふ
 正に椿事である

4
 警部親友の如き者ありては、
 悪人なり、警察に御引渡しを乞ふ
 正に椿事である

5
 警部親友の如き者ありては、
 悪人なり、警察に御引渡しを乞ふ
 正に椿事である

6
 警部親友の如き者ありては、
 悪人なり、警察に御引渡しを乞ふ
 正に椿事である

7
 警部親友の如き者ありては、
 悪人なり、警察に御引渡しを乞ふ
 正に椿事である

8
 警部親友の如き者ありては、
 悪人なり、警察に御引渡しを乞ふ
 正に椿事である

9
 警部親友の如き者ありては、
 悪人なり、警察に御引渡しを乞ふ
 正に椿事である

10
 警部親友の如き者ありては、
 悪人なり、警察に御引渡しを乞ふ
 正に椿事である

11
 警部親友の如き者ありては、
 悪人なり、警察に御引渡しを乞ふ
 正に椿事である

12
 警部親友の如き者ありては、
 悪人なり、警察に御引渡しを乞ふ
 正に椿事である

13
 警部親友の如き者ありては、
 悪人なり、警察に御引渡しを乞ふ
 正に椿事である

14
 警部親友の如き者ありては、
 悪人なり、警察に御引渡しを乞ふ
 正に椿事である

15
 警部親友の如き者ありては、
 悪人なり、警察に御引渡しを乞ふ
 正に椿事である

16
 警部親友の如き者ありては、
 悪人なり、警察に御引渡しを乞ふ
 正に椿事である



編集後記

▽二〇一五年は乱歩没後五十年にあたり、昨年ひきつづき旧乱歩邸にもたくさんのお取材がありました。旧乱歩邸の知名度もあがり、さらに多くの見学者が訪れました。

▽二〇一五年は戦後七十年でもありました。東京芸術劇場、豊高区、立教大学の「池袋II自由文化都市プロジェクト」による「戦後池袋―ヤミ市から自由文化都市へ」の企画が九月に開催されました。この企画については『大衆文化』第十三号(二〇一五年九月)、第十四号(二〇一六年三月)をご覧いただければと思います。

▽新青年研究会『新青年』趣味』第十六号(二〇一五年十月)に、「乱歩の未発表原稿「独語」」が掲載されました。昭和十一年、「怪人二十面相」を連載していた時期に、文学や哲学の読書について書いたものです。ドストエフスキー、ジイド、ニーチェといった名前が出ています。

▽十二月九日、立教大学名誉教授、平井隆太郎氏が肺炎により九十四歳で亡くなりました。社会学者として教鞭を執られてきただけでなく、江戸川乱歩の長男として、その資料の保存と活用に尽力して来られました。本学卒業生で編集者の戸川安宣氏に、隆太郎先生についてお書きいただきました。

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター
セ ン タ ー 通 信 第十号

二〇一六年三月二十五日 発行
編集・発行 立教大学江戸川乱歩記念
大衆文化研究センター
〒一七一八五〇一
東京都豊高区西池袋三―三三四―一
電話番号 〇三―三九八五―四六四一
(FAX兼) rampo@rikyo.ac.jp

公開日 水曜・金曜(祝日は除く)
(十時三十分～十六時)